

タッキリ溪流域地方の印文土器遺跡*

国 分 直 一

Impressed Pottery Sites in the Takidis (Takilis) River District

By

Naoichi KOKUBU

Viewed from the archaeological study of Formosa, the north eastern part of Formosa seems to be an unacquainted region. However, prior to the Pacific War, Professors N. UTSURIKAWA, N. MIYAMOTO and T. MABUCHI made their ethnological survey in this region and collected archaeological materials.

Professor T. MABUCHI especially made a very careful survey along the Takidis River and its tributary. Never having the opportunity to visit the prehistoric sites along the Takidis River and its tributary, the author is dependent chiefly on the notes of the register of the Taihoku University Museum and on field notes made by Professor T. MABUCHI.

The prepared plates of the archaeological materials from the Takidis River district were made by the author in 1949, the last year of the author's research activities in Formosa.

With regard to the impressed design pottery associated with iron implements found along the Takidis River and its tributary, Tausai River, the Atayal people generally believe that these have been left by the Mək-quaolin. According to the Atayal legend, the Mək-quaolin is believed to be the ancestor of the Kuvaran, Pangtsah or Formosan Chinese.

The pottery with impressed design is known in the wide area of the northern coastal district. And the potsherds are usually associated with the artifacts of the tribes of the Ketagalan and Kuvaran.

With regard to the origin of the pottery with impressed design, the author's opinion is as follows.

No traces of the pottery with impressed design are yet known on the southern islands including Itanasai, Botel-tobago and islands of the Philippines. The affinities, however, with the impressed design of the hard pottery from the coastal area of South China seems to be worthy of attention.

* 水産大学校研究業績 第445号 1965年2月9日 受理
Contribution from the Shimomoseki University of Fisheries, No. 445
Received Feb. 9, 1965

The author believes that the impressed design pottery culture must have been introduced from south China into some part of north western coastal district of Formosa in the later prehistoric stage. And then it appears that both techniques and some of the design patterns were introduced from some of the culture bases of the north western Formosa into the district of the Ketagalan and Kuvaran. The hard black pottery of fine quality associated with Chinese procelains is known from the site of the mouth of River Takidis too. It appears that these hard black pottery and Chinese procelains may have been introduced into the site of the mouth of River Takidis as a trade good for the gold from the Takidis River in the days prior to the invasion by the Atayal people.

I 序

タツキリ溪が塔山, 三錐山の間を侵蝕して海岸に出る付近には3段にわたる河成段丘が形成されている。現在プセガン社, デカロン社, タツキリ社およびこれらを連結している蘇花道路は最上段の段丘上に設けられている。この付近は砂金の産地として古くから知られている。この蘇花道路はデカロン社とタツキリ社の間で大きくメアンダーしているが, その付近に山本砂金鉱区があった (Figs. 1, 2)。山本義信氏によって

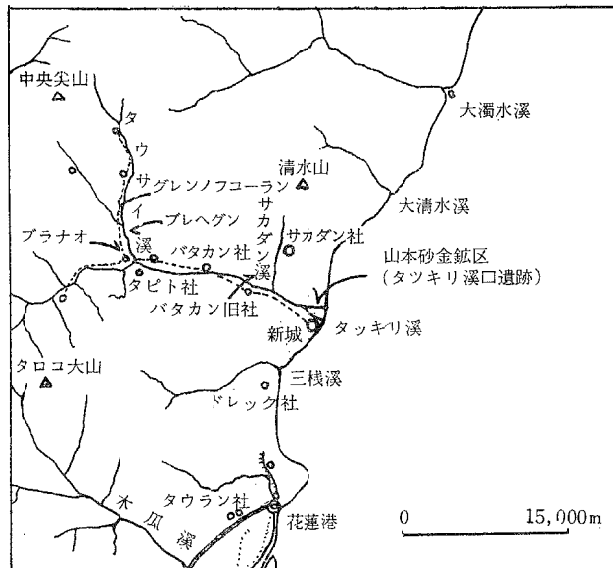


Fig. 1. Sites of impressed pottery along the Takidis Valley.

砂金の採集が行なわれていたのである。土器および純金製品が発見されたのは昭和10年11月頃のことである。同年11月9日の台南新報に「タツキリ溪右岸で黄金の延棒発掘, 多数の土器類も発見さる」と題した記事が見えている。その後, 移川子之蔵教授が宮本延人氏 (現東海大学教授) を伴われて, 調査され, 土器類を集めて帰学したことが南方土俗第4巻第3号 (昭和12年5月) に見えている。移川教授らの調査報告は遂に世に出なかったが, 遺物は台北大学土俗人類学教室付属博物館に保存され, 終戦後は台湾大学考古人類学教室にひきつがれている。現在, 台湾大学地質学研究室におられる林朝榮教授は当時, 山本砂金鉱区出土の金製

品および純金鍍層をもらい受け、台北大学土俗人種学教室に寄贈された。

しかし林教授寄贈の金製品（耳飾と見られた）は第2次大戦末期に資料の疎開中に失われたため現存していない。

タツキリ溪水域においては、溪口におけるだけでなく、中流、上流のアタル族の占拠する山岳地方においても、溪口出土々器に酷似する土器が発見されている。それらは馬淵東一氏（現東京都立大教授）が移川子之蔵教授の教室におられた時代の採集によるものである。

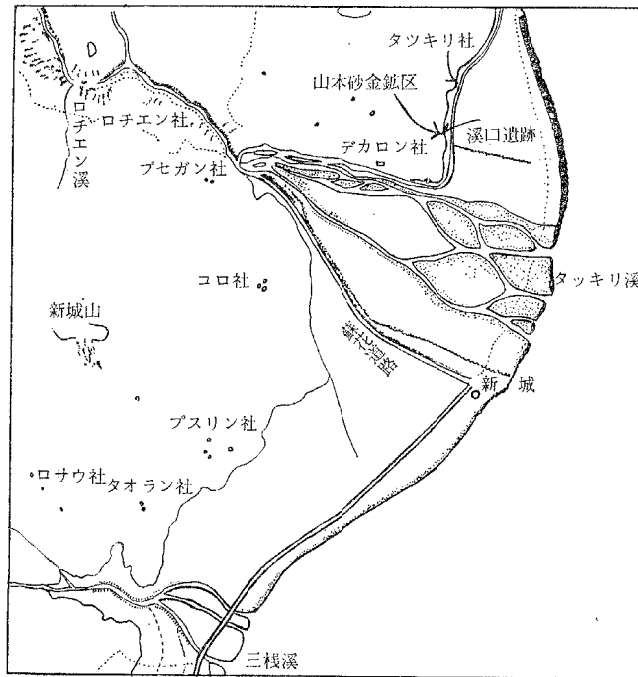


Fig. 2. Mouth of the River Takidis.

タツキリ溪河口資料もアタル族占拠の山岳地方資料も、戦争の拡大、終戦による日本人学者の引き揚げ等のために未整理のまま残されるに至った。しかし筆者は戦後、台湾大学に残留中、資料の整理に当ることができたので、それら遺物の集成図を作ることができた。台湾大学考古人類学系の博物館には採集当時の覚え書きをのせた標本台帳が確保されていた。その上、幸に馬淵東一教授から、筆者の日本帰還後、教授の採集活動当時の状況についての覚え書きをよせていただいたので、タツキリ水域地方の遺物の状況を報告し、その遺物を通して、台湾北部沿岸地方文化との関連について考察しておきたい。

II タツキリ溪口遺跡

タツキリ溪口段丘上遺跡は筆者未踏査の遺跡であるために、遺物の出土状況の詳細は不明である。包含される文化に層序関係があるものかどうか不明である。しかしながら石錘かと思られるものを除くなら、石鏃のごときも、発見されていないことよりして、金属時代にはいつから後の遺跡であろうと考えている。

1 土器 土器は印文土器と無文土器にわけられる。

(a) 印文土器 色調は灰褐色もしくはやや赤調を帯びた灰褐色を呈している。胎土には微細な砂質を混じている。器形は外反する口縁を示し、鼓胴、円底を示す完形品が採集されている。口縁部の復原できた

ものは完形品以外に7例あるが、それらによると、口縁の器形にはややヴァラエティが見出される (Pl. I, Figs. 1~4, 6~8)。

印文は木製の叩き具の器面に彫刻したものをを用いて叩いて施文したと見られる。文様は格子目文、波状文、山形文、水平に重ねた凹庄文と格子目文または波状文あるいは山形文を組み合わせたもの等が見出される。

口縁部について見るに、水平に磨研を加えたものの他に縦に平行に筭痕をとどめたものがある。印文土器は復原形から見て、小型のものを主体とるように見えることから、あるいは特殊な祭具的な意義をもつものではないかと考える。

タツキリ溪々口出土の印文土器はクヴァラン族、ケタガラン族の占拠していた台湾北東部沿岸地方の遺跡出土の土器に酷似している。同様の土器は基隆、淡水地区の沿海地方から台北盆地にかけて、石器使用が殆んど終滅期にきたと見られる遺跡において流行している。

(b) **無文土器** 器形はややバラエティに富む。その1は外反口縁、鼓胴、円底の形式を示すもの。その2は外反する口縁、張った肩部を有し、脚台をもつ形式を示すもの。その3は細頸、扁平の壺形を示すもの。

第1形式：色調は灰黒色、火度は高く、器形のやや大形のもの (Pl. IV, Fig. 1) と、パングツアハ族のデウスに類似するきわめて小型のもの (Pl. IV, Fig. 3) とがある。前者は焼成から見て、台湾西部海岸北部に見られる後期黒陶に近似する。

第2形式：口縁から肩部にかけて縦に把手がついている。この形式の器形は脚台を有していると見られる (Pl. IV, Fig. 5)。

第3形式：細頸、扁平の壺 (Pl. V, Fig. 2) 色調はやや帯紅の灰褐色。パングツアハ族の壺には皮袋を模したかと思われるような壺がある。奇密社発見の細頸扁平の壺には頸部に細い紐帯の面影をとどめる隆起文が見出される (Pl. V, Fig. 1)。タツキリ溪々口遺跡発見の細頸扁平の壺は奇密社壺と同系のもので見てよいであろう。同系の扁平の壺にして、百歩蛇を附した壺がパイワン族の間に見出される。

以上の他に把手の破片が多数採集されている。第2形式の土器に附せられた縦形式の把手であるが、パングツアハ族に広く行なわれている大形壺型土器に見られる水平形式の把手であるかは不明である。

これら先史系土器と共存して発見されているものに、近代中国の日常用陶器がある。藍の染附、鉛色の釉を有するもの、白色の釉を有するもの、黒褐色または褐色で無釉のもの、青磁、等の破片が多数採集されている。その量は豊富であるから、この遺跡において近代中国日常用陶器が先史系土器と共存して盛行していたものと見てよからう。

(c) **特殊な遺物** 紡錘車が発見されている。珠算用の珠に似た形式が流行しているが、下端は扁平に整形し、全体の器形を山形に造形したものもある (Pl. VI, Figs. 5~8)。

犬を模したと見られる土偶の1例が採集されている (Pl. VI, Fig. 1)。

何んらかの装具を模したと見られる小品がある。ケタガラン族の木彫には人形の頭部に頭冠状にほぼ同様の刻画を有するものがある (台湾大学考古人類学教室附属博物館所蔵)。実体はそういうものを模したものでなからうか (Pl. VI, Fig. 3)。

2 石 器 石器として発見されるのは主として石錘かと思われるものが発見されているに過ぎない。石質は硬砂岩。中央の凹部を締め、頭頂部の凹部から十字形に縛り、使用したものでなからうかと考える (Pl. VII, Figs. 1~3, 5)。同様の石器はケタガラン族の占拠していた基隆港々口の社寮島遺跡からも発見されている。

他に扁平のやや化粧用石輪形の石器がある。上下両面、両側面に磨研が加えられている (Pl. VII, Fig. 4) 土器の器形を整形するのに、自然の扁平円礫を用いる例はパングツアハ族、ヤミ族等において見られるが、上述の扁平磨研石器が同様の用途をもつものであるかどうかは不明である。

3 装身具 金色透明の管玉が1例見られる (Pl. VI, Fig. 2)。金関丈夫博士が同遺跡を調査された際、

骨を収めた納骨堂の中からとり出された頭骨中に見出されたものである。

4 切り込みのある鹿角 金属器を使用しなければ出現しないであろうと見られる切込跡をとどめる鹿角1例が見られる(Pl. VI, Fig. 4)。

以上あげた資料以外で最も注目すべきは金製品である。第2次大戦末期まで台北大学土俗人種学教室付属博物館に純金(金箔)の耳飾および鍍層(純金)等が保管されていたが、戦時中、資料の疎開中紛失してしまったことは上述した。その耳飾は耳朶にはめた竹製あるいは骨製の耳飾の両端にはめ飾られたものであらうと思われる。当時保管され、戦後まで保存されているものに、針金状の条金1、青銅の鍍層1、針金状製品1がある。

台北県北斗の炭鉱業者李炎海氏(76才)は60年前タツキリ溪右岸で砂金採集の使用人として働いていたが、タロコ蕃の脅迫のため、逃亡せざるを得なくなって、黄金の棒を砂中に埋藏したと云う。後、掘って見ると4寸位の金の棒2体があったという(台南新報 昭和10年11月9日)。幣原坦博士はこの記事にふれて、「南方文化の建設へ」において、蕃境補遺や淡水庁誌の哆囉滿についての記載に見える「番人鐘成条」とあるに符節を合するごとくであると述べている¹⁾。

諸羅県誌卷八雑俗(康熙56)に「蛤仔難、哆囉滿等社」とあるその哆囉滿(滿)の位置を考える上に示唆的である。蛤仔難がカバランもしくはクヴァランであり、それが多くの蕃社を総合した種族名を示すものであることからよりして、哆囉滿もまた若干の蕃社を総合した部族名をさしたものであらうが、同時にそれは彼ら部族の居住地方をさす名称ともなったかと思われる。幣原博士によると、福留喜之助氏が台湾鉱業会報 第148号 および 第152号 において哆囉滿のことを究め、哆囉滿は19社の総合であること、その拠地は大濁水溪右岸のゲークッ地方であらうと推定されているという(筆者未見の文献であるので幣原博士所引の内容によった²⁾)。福留氏説に対して鈴木喜義氏は哆囉滿の位置をタツキリ溪々口左岸の蘇花道路に沿う地帯であらうと主張されている。その根拠の一つとして、以上の地帯にある山本砂金鉱区から、土器、青磁様のもの、金環、金線用の加工品が出土していることをあげ、往昔、砂金を中心とした貿易が行なわれたものとし、哆囉滿の故地であることの有力な証跡とされた³⁾。

移川子之蔵博士はオランダの古文書によって、カバラン管内(De Bocht van Cabalangk)すなわちサンチャゴ(三貂)以南、宜蘭の平野を中心として見られる39の部落名をサカリすなわちカバラン族の歌謡と対照し、これを現存の蕃社と対照せしめた表をかかげておられる。その38に Tarochan de Soedidis とあるのはすなわち哆囉滿であるとし、これに註記して、Tukidis または Takidis にして、今のタツキリ付近とされた⁴⁾。

筆者はタツキリ溪口遺跡において、条金その他の金製品の出土することは、郁永河の蕃境補遺に「哆囉滿淘沙出土 與瓜子相似 蕃人鑄成条 蔵巨壁中」とある記載に一致することから、タツキリ溪口遺跡は哆囉滿の一部によって遺されたものと考えられる。しかして、同遺跡から出土する近世中国陶器は金を対象とする貿易品として登場したのと考えられる。また中国陶器に混じて、後期黒陶系の土器が登場していることは、台湾西北海岸地方との交渉を想わせるものがあると考えられる。

Ⅲ タツキリ溪峡谷およびタツキリ溪支流タウサイ渓流域地方における遺跡

タツキリ溪口に栄えた哆囉滿のものと思われる文化はタツキリ峡谷やその支谷を通して、展開したと見られる。

台湾大学考古人類学系の博物館所蔵の資料を通して、タツキリ溪峡谷および支流タウサイ渓流域の遺跡の状況をあげておきたい。

1 バタカン旧社遺跡

バタカン旧社は三錐山東南山縁、標高485mの地点に位置している。サカダン溪とタツキリ溪の間にはさまれた地方である。

バタカン旧社出土土器は赤褐色もしくは褐色の印文土器 (Pl. III, Figs. 11~13) と火度の高い黒色良質の後期黒陶片とである。

印文には格子目の印文と条痕文が見られる。いずれもタッキリ溪々口遺跡出土の印文中に見出されるものである。

後期黒陶系と見られる黒色土器と印文土器との共伴はタッキリ溪々口遺跡において見出されたものであることから見て、哆囉滿の故地と見られるタッキリ溪々口の文化がタッキリ河流域をさか上っていることは確実であると考えられる。

2 ブラナオ社上方洞窟遺跡

馬淵東一教授はソワサル社で Mək-quaolin の脛骨が出る場所がブラナオ社 (4,400尺) 上方にあると聞き、昭和6年に調査されたと教示された。ブラナオ社はタッキリ溪とタウサイ溪と合流するあたりに位置するタビト (Tupido) からタウサイ溪を遡ると溪の東側に位置している。馬淵東一教授は「傾斜した畑地を登って、畑地と接近した岩底の如き所へ軽く腰をかがめて這入ったと思う。洞窟といっても、その程度で畳1枚か1枚半位の面積であったろうか。骨は地表に現われていた。土器破片と鉄器は軽く土を被るか、被らぬかの程度であったろうか。タロコ蕃にとってこの地は別に禁忌でもなかったようであるが、わざわざいじっても見ない程度のものであった」と覚え書きをよせられた。

当時、採集された資料としては、ほぼ1体分の人骨と棘槍、庖刀、スレート製紡錘車および格子目の印文を有する灰褐色土器 (Pl. III, Fig. 2) がある。印文土器は明らかにタッキリ溪口遺跡系の土器と見られる。

馬淵東一教授はバタカン社東南のブロン社で興味深い聞書を作られている。全上聞書によると、シタガン社上方 (大体北方であろうという) に洞窟あり、ここに Mək-quaolin が荷物を残して平地に降った。この洞窟には鉄鎌、土釜などが今も残っているという。

3 プレヘゲン社遺跡

遺跡の位置はタッキリ溪支流のタウサイ溪中流右岸台地 (標高3,000—4,000尺の間) の畑地。採集された土器は灰褐色の印文土器片である (Pl. I, Fig. 5; Pl. III, Figs. 3~5, 8~16)。印文には格子目文、条根文、波状文が見られる。土器はタッキリ溪々口遺跡系の土器と見られる。馬淵東一教授によるとタウサイ蕃はこれらの土器を Pəlmokan (本島人) の作ったもので、Mək-quaolin の作ではないという。しかしタウサイ溪はタロコ蕃ほどには Mək-quaolin のことを詳しく伝えていない。彼らの所在地の関係もあるであろうと教示された。

4 ワヘル社上方のグレンノフ コーラン遺跡

タウサイ溪およびその支流コワヘル溪の合流点付近、コワヘル溪岸4,000尺付近に遺跡がある。馬淵東一教授の御教示によると、グレンノフコーランでは Mək-quaolin の石垣といわれるものの中に土器破片や粘土製の紡錘車のごときものが発見されたとされる。土器は灰褐色の印文土器片 (Pl. III, Figs. 1, 6, 7)。印文は格子目文。タッキリ溪々口遺跡系の土器と見られる。

IV 印文土器の性質・Mək-quaolin の問題

以上においてタッキリ溪およびその支流々域の山地々方に見られるアタル族占住以前に遺物、特に土器の性質を明らかにした。その印文土器はタッキリ溪々口遺跡の土器に類縁をもつものであった。

現在タッキリ溪およびその支流に分布するアタル族は固有の土器をもっていない。アタル族もかつて土器製作の技術をもっていたと考えられるが、その技術はある時期に失われたと見られる。しかるにアタル族が Mək-quaolin とよんでいた先住民は印文土器をもっていたのである。アタル族は東方に進出して、彼らの跡を襲ったと見られる。高砂族所属系統の研究は各蕃社の口述者によって Mək-quaolin とよばれるものが如何なる種族であるかについて、その見解を次のように要約している。

- 1 漢族 (Pəlmokan) とするもの……ロードフ社・ブガアル社
 - 2 平地人すなわちパングツアハ族・クヴァラン族および漢族の祖先とするもの……トブラ社
 - 3 小人 (Mə-sing-singut) とするもの……ロサオ社・セラオカフニ社
 - 4 シラガン社およびソワサル社では彼らがタロコ蕃より幾分長身であったという。しかしその種族は明らかでない。
 - 5 クバラン族とするもの……サカダン社・タツキリ社・ブロワン社・シラツク社・クバヤン社
- 高砂族所属系統の研究は多くの口碑によって、その逃避移動した地方を求めて次のように結ぶ⁶⁾。

Mək-quaolin が北方に逃れたといふ点では何れも一致して居り、多くはかれらが蘇澳に逃れたと云ひ、また特に注意すべきは現在大南澳の浪速に来てゐると云はれて居ることである。これは既に南澳蕃のところで述べておいたごとく所謂瑪瑙蘭三十六社の一である猴猴社の系統に属するものであって、最近蘇澳の南方澳から移住して来たのである。(中略) 恐らくこの Mək-quaolin は元来海岸から大濁水、タツキリ河流域の山地にかけて住んでゐたのであるが、台中州方面から中央山脈を突破して侵入し来れるアタル族に対抗し得ず次第に東北方に退いたものであらう。

タツキリ溪およびその支流タウサイ溪に分布するきわめて親縁性の強い土器に近似する土器はタツキリ溪々口以北、宜蘭平野、基隆地方から、淡水地方沿岸、台北盆地にわたって発見されるが、それら北辺に分布する印文土器は如何なる種族と関係するものであらうか。北辺沿岸の原住民族は、語族として、大きくわけて、クヴァラン族とケタガラン族がある。Mək-quaolin についてはアタル族の伝説ではクヴァラン族の祖先と見る見方が優勢である。移川子之蔵博士によると、哆囉滿そのものも精密に言えばクヴァラン中に包含せしめるのは少し無理かも知れないとされる。しかし方言の上から、クヴァラン語族の亜系とみることは許されるであらう。その上共通の文化をもっていたと見られるから、哆囉滿と関係をもつと考えられるタツキリ溪、タウサイ河流域に遺物をのこしたと見られる Mək-quaolin がアタル族から見て、クヴァラン族と見なされたことは自然だったと考える。

クヴァラン族とケタガラン族とは方言の上で2つの語族ではあるが、近縁の語族であることは疑いえない。物質文化特に土器の上では共通する印文土器をもっていた。その印文土器は何処に起源するものであらうか。

クヴァラン族もケタガラン族もその故地は Sunasai, Sansai などとよばれる東南方、または南方の島だと伝えている。東海岸の原住民族は台東東方海上の火烧島を Sunasai, Sanayasai あるいは Sanasan とよぶことからすると、火烧島を経て北上したもののようによく考えられる。しかしながら南勢アミの荳蘭社、里漏社および帰化社では椰子の樹あるいは果実を Sanasai とよぶことは注目される。これらの諸社に隣接する加礼宛庄のクヴァラン族はその影響か、同様に Sunasai とよぶ。このことから見てクヴァラン族の Sunasai とは遙か彼方なる恐らく南方の椰子の樹繁る島を漠然と指しているのではあるまいかと移川子之蔵博士、馬淵東一教授は想定された⁷⁾。

しかしながらクヴァラン族、ケタガラン族およびその亜系の間に流行した印文土器は南方から伴ったものとは考え難い。火烧島にも、もっと南方の椰子繁るバシー海峡やバリントン海峡の島々にも、ルソン島にも印文土器は登場しない。

新竹県苑裡貝塚を中心とする台湾西北部海岸地方にはケタガラン族、クヴァラン族の印文土器に近縁を有すると見られる印文土器が登場する。ことに苑裡貝塚においてはヴァラエティに富む火度の高い印文土器が、後期黒陶と伴出する。台湾西北部のこの種印文土器に近似のものを島外に求めるなら華南の印文硬陶をあげるより他ないと考える。華南の印文硬陶が台湾西北部海辺地方に金属器とともに登場するや、石器使用は急速に衰退に向かう。ケタガラン族、クヴァラン族が台湾東北海辺地方に定着した当時は既に鉄器使用の段階にあったと見られるが、その印文土器は台湾西北海辺系の技術を受けたものでなからうかと考える。それはケタガラン族にまず受容され、ケタガラン族を通してクヴァラン族やその亜系の間に拡がったものではなからうか。しかし注目すべきことはタツキリ溪々口遺跡には印文土器とともに後期黒陶系と見られる火度の高

い灰黒色土器が登場していることである。この種の土器はケタガラン族、クヴァラン族の分布地区では未見である。

筆者はこれを貿易品と見、台湾西海岸北部海辺地方との海上を通しての直接交渉を想わせるものがあると考えた。

V 結 語

以上あげたタツキリ溪およびその支流水域の諸遺跡については、台北大学土俗人種学教室の標本台帳には地図上の指示がなされていない。その大体の位置は馬淵東一教授の御教示を受けたので推測はできるが、筆者実査の遺跡でないために正確に明示できないうらみがある。従って同上の指示は大体の推測位置であることを断っておかなくてはならない。

なお、各遺跡について発掘を行っていないので、文化層の状況が不明である。もし発掘作業を将来行なう機会にめぐまれるなら、文化層の追跡を通して、種族交渉の状況をおさえることが可能となるかも知れないと考える。

本報文を草するに当り東京都立大学の馬淵東一教授の与えられた御協助に感謝を捧げたい。また、Plate V にのせたタツキリ溪タロ遺跡および奇密社の扁平型の壺のイラストレーションは台湾大学考古人類学系の陳奇祿教授の手になれるものであることを明記して、陳奇祿教授の御好意に感謝を捧げたい。

文 献

- 1) 幣原 坦, 1938: 南方文化の建設, 第14章 pp. 307—308.
- 2) 幣原 坦, 1938: 南方文化の建設, 第14章 pp. 308—309.
- 3) 鈴木喜義, 1937: タツキリ溪下流附近の砂金採集に関する歴史的考察. 台湾時報, 209号.
- 4)* 移川子之蔵, 1936: 漢治以前に於ける蘭陽平野の住民. 台湾時報, 196号.
- 5) 移川子之蔵・宮本延人・馬淵東一, 1935: 高砂族所属系統の研究 第1章アタヤル族 3 タツキリ溪流域地方の先住民. P. 89.
- 6) 全上
- 7) 移川子之蔵・馬淵東一, 1939: マツカイ博士の布教せる噶瑪蘭平埔族に就いて. 淡水学園叢書, 第2篇 マツカイ博士の業績.

移川教授はその後、馬淵東一教授との共著「マツカイ博士の布教せる噶瑪蘭平埔族に就いて」淡水学園叢書 第2篇 マツカイ博士の業績 (1939) において、哆囉滿の故地の問題にふれている。中村孝志教授は「台湾に於けるオランダ人の探金事業」天理大学報 第1巻第1号 (1949) において哆囉滿の故地についての諸説を紹介している。

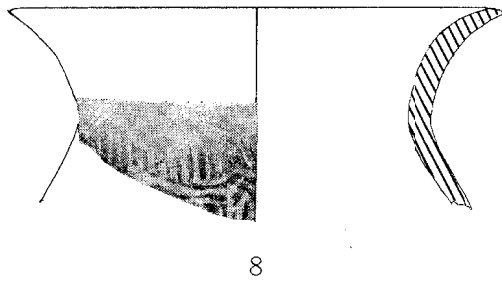
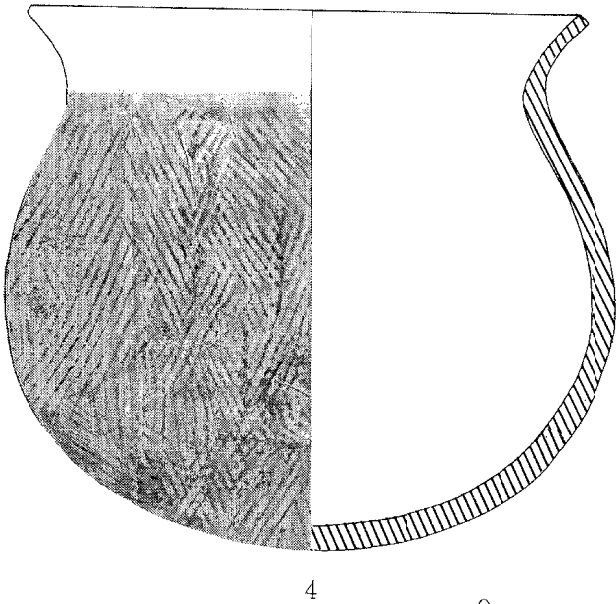
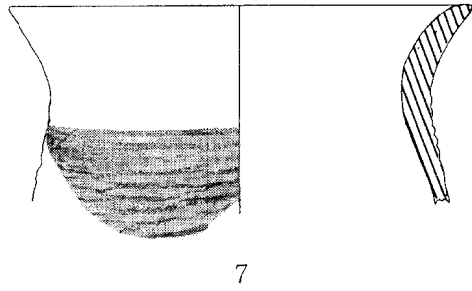
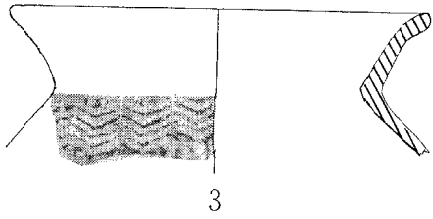
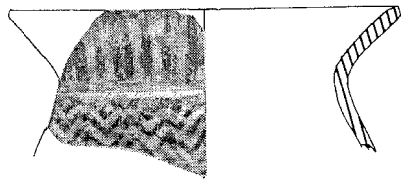
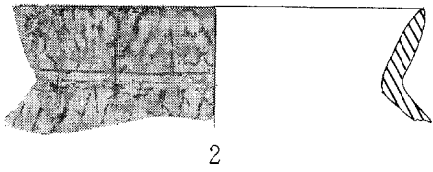
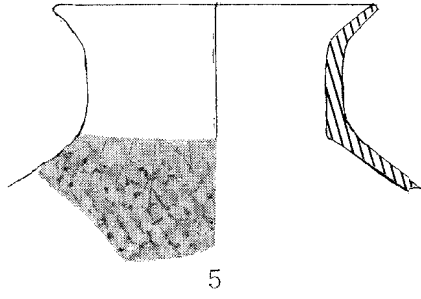
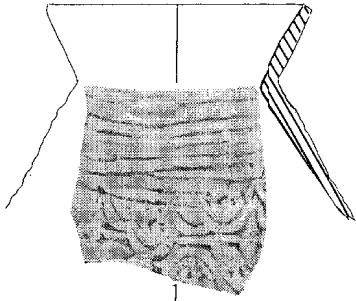
追記: 第1図においてブラナオ遺跡の位置をタウサイ溪西岸に指示したのは誤りである。溪をさか上った東岸に指示すべきであった。追記して訂正する。

P L A T E

PLATE I

Impressed potteries reconstructed from the site of the mouth of River Takidis.

PLATE I



0 5 cm

PLATE II

Rubbings of the potsherds with impressed designs from the site of the mouth of River Takidis.

PLATE II

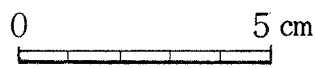
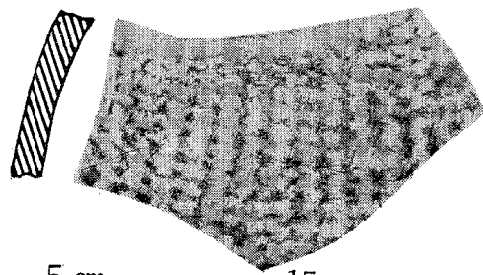
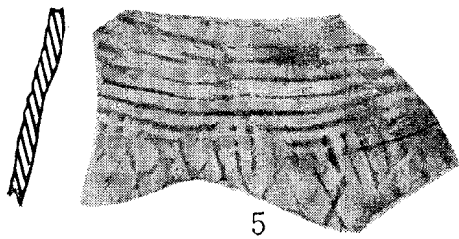
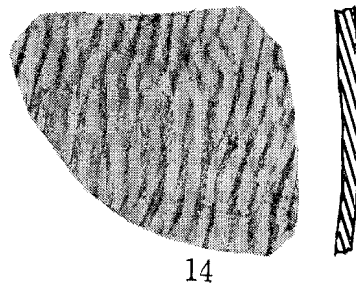
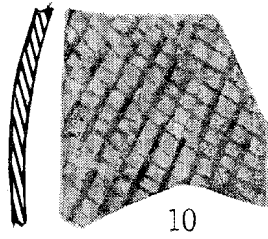
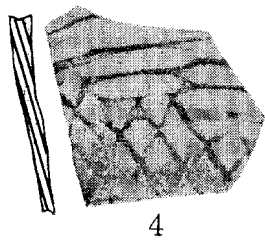
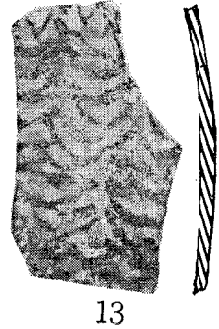
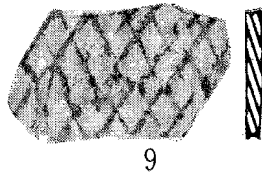
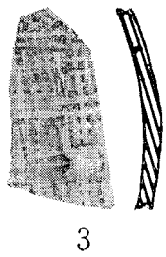
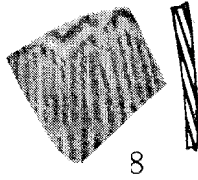
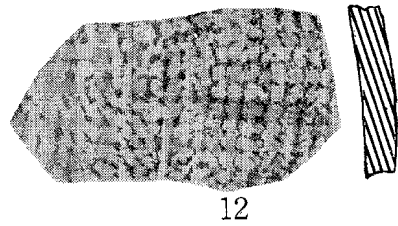
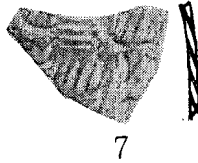
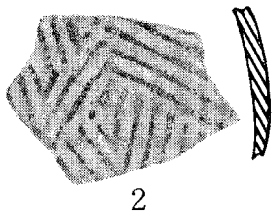
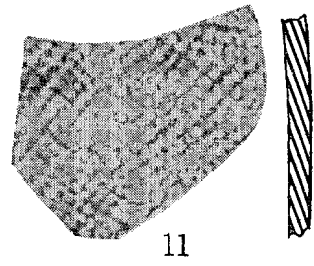
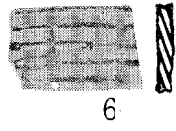
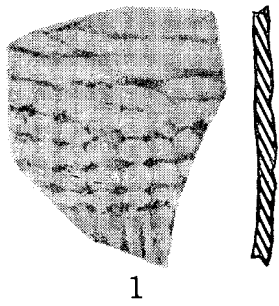
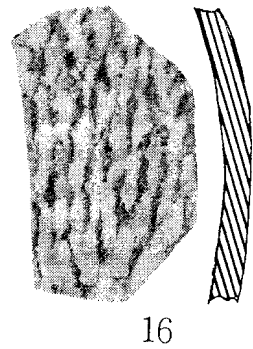
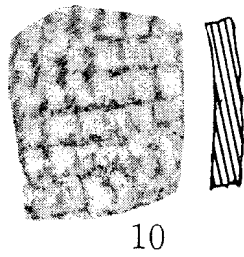
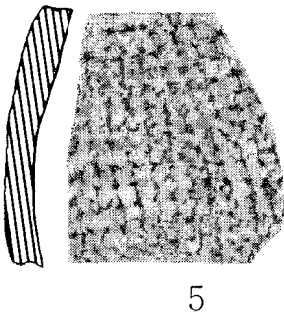
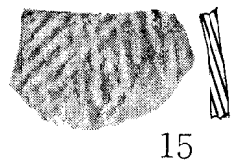
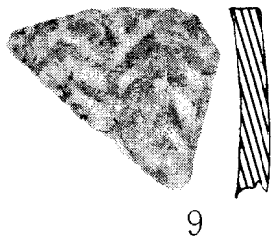
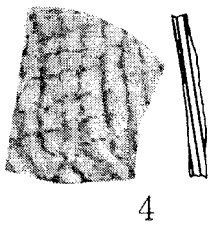
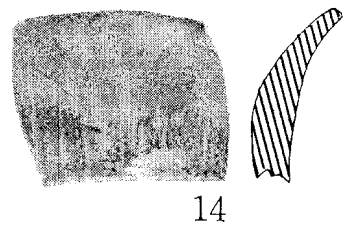
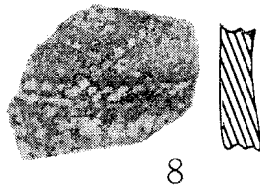
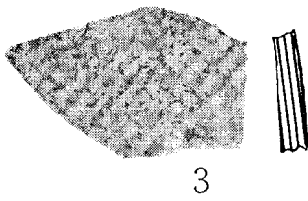
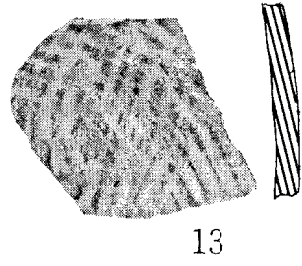
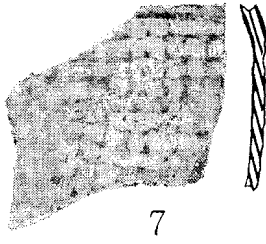
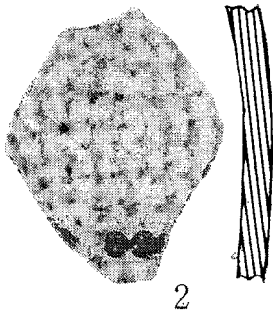
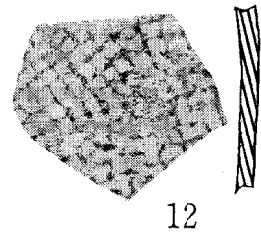
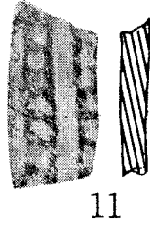
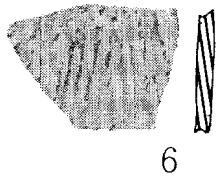
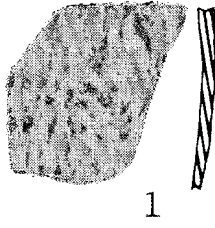


PLATE III

Rubbings of the potsherds with impressed designs from the sites along River Takidis and its tributary, River Tausai.

PLATE III



0 5 cm

PLATE IV

Potteries from the site of the mouth of River Takidis.

PLATE IV

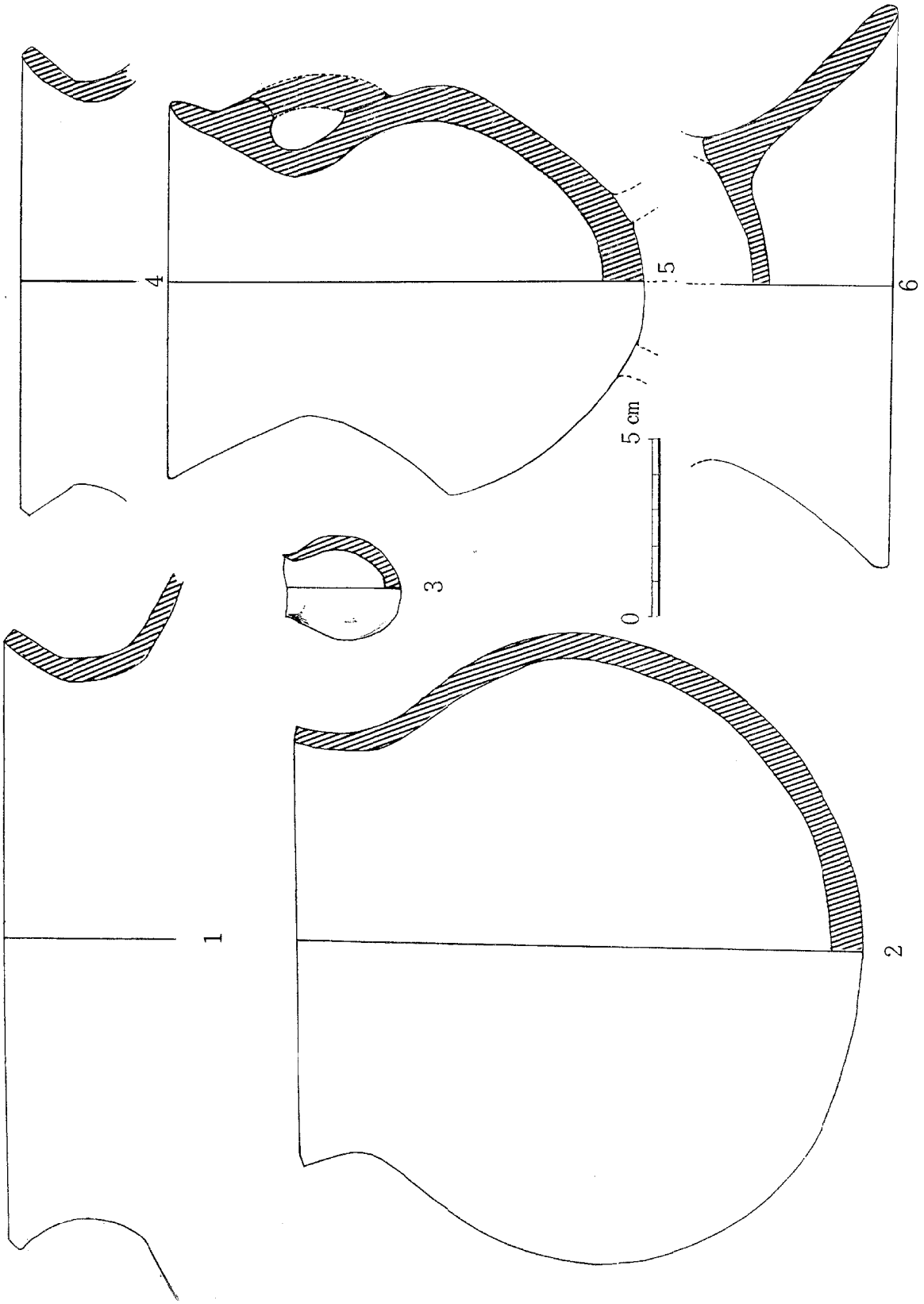


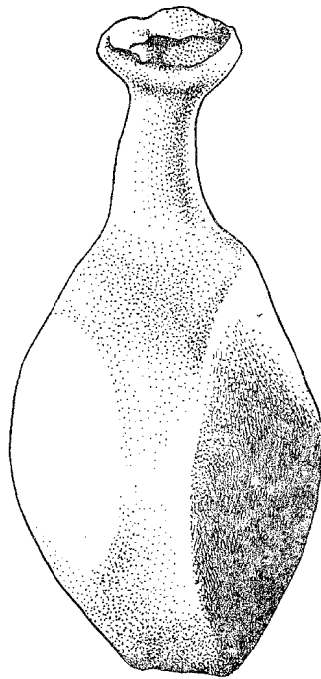
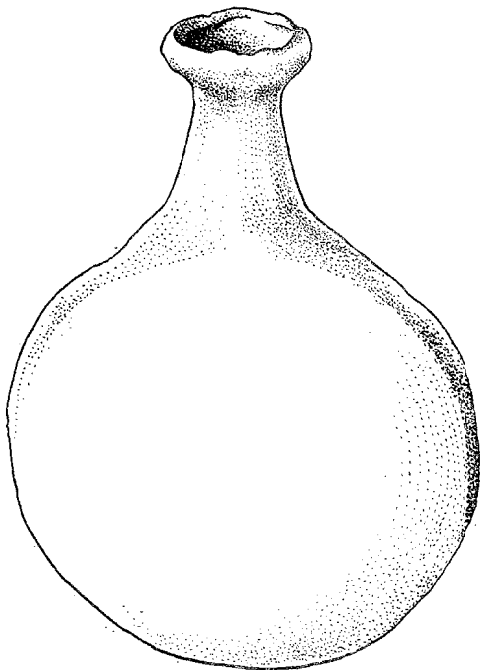
PLATE V

Flat type pottery (Drawings by Prof. Chen Chi-lu).

1. Pottery from the site of the mouth of River Takidis Height : 23 cm
2. Pottery from a Pangtsah tribe Height : 22.9 cm



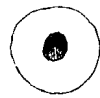
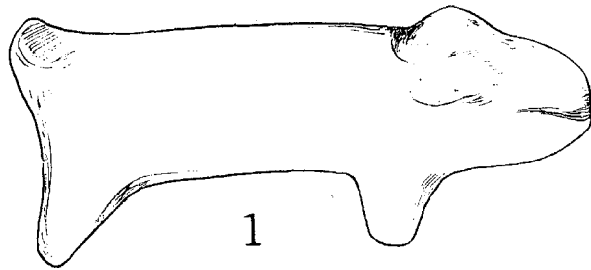
1



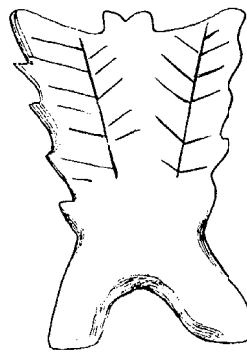
2

PLATE VI

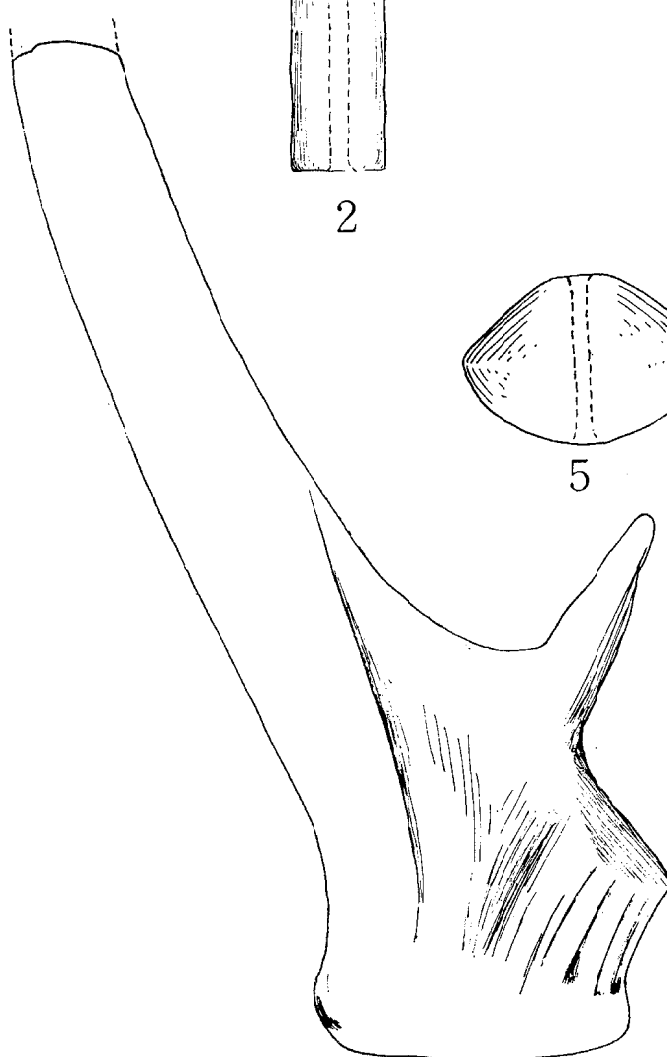
Stone implements from the site of the mouth of River Takidis.



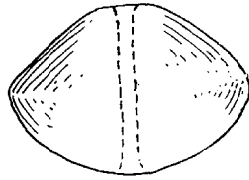
2



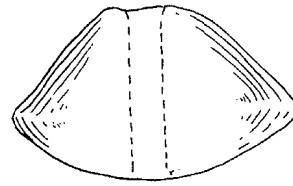
3



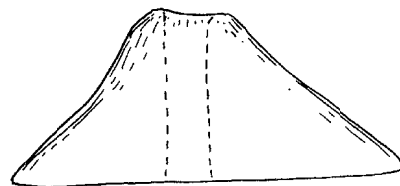
4



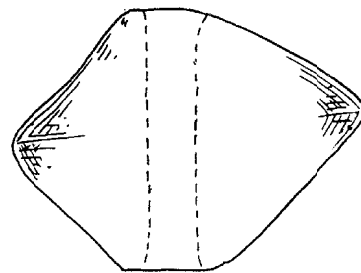
5



6



7

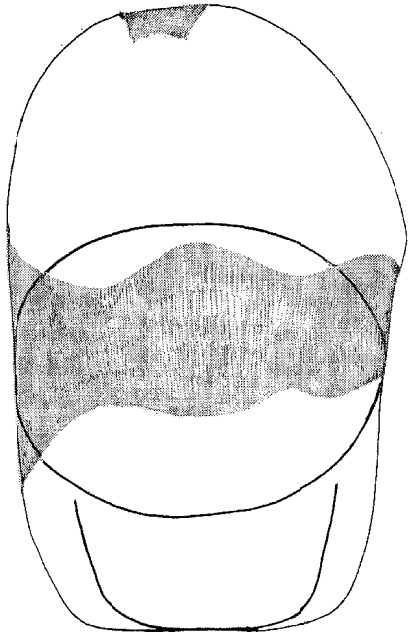


8

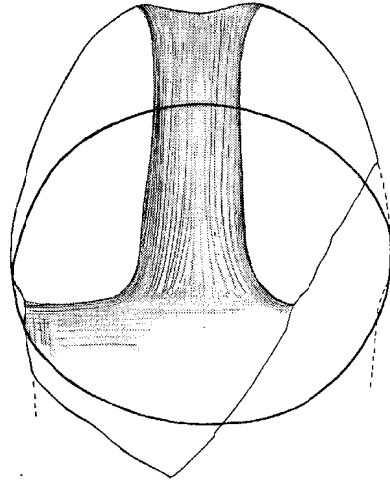


PLATE VII

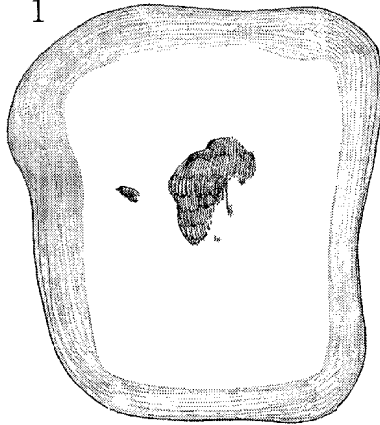
Artifacts from the sites of the mouth of River Takidis.



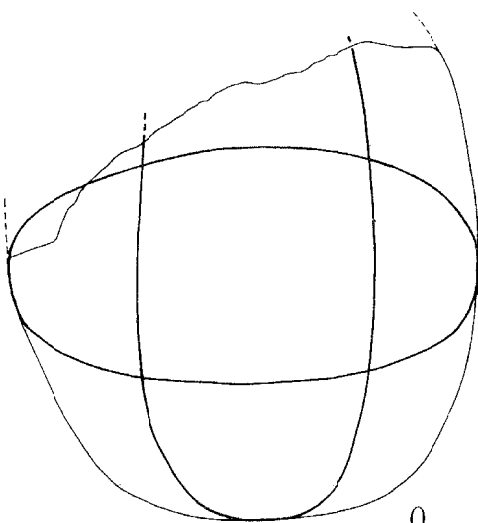
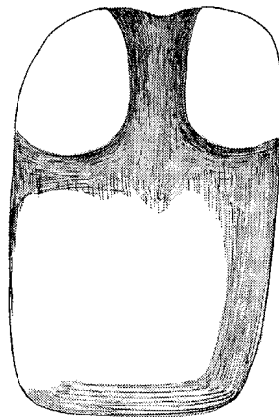
1



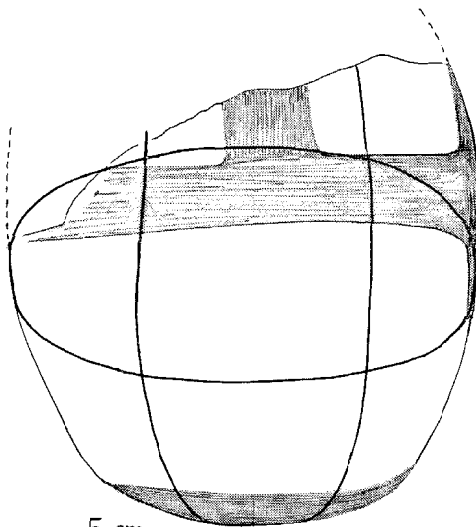
2



3



4



5

